

琵琶湖北湖における近年 5 年間のブルーギル繁殖動態

高野裕樹¹・中尾博行¹・南野洋孝¹・川端健人^{1,2}・兼頭淳^{1,3}・木村浩和¹
中井克樹⁴・沢田裕一¹

¹ 滋賀県立大学大学院環境科学研究科

² 現 環境機器株式会社

³ 現 九州大学大学院生物資源環境科学府

⁴ 滋賀県立琵琶湖博物館

ブルーギル *Lepomis macrochirus* は現在，日本の多くの湖沼や溜池で見られるアメリカ原産の外来魚である．日本には 1960 年に初めて持ち込まれ，琵琶湖では 1965 年に内湖である西ノ湖で初めて確認された．その後琵琶湖では 1990 年代半ば以降，南湖で急激にその数を増やしたと言われ，現在は本来の生態系を回復すべくオオクチバスとあわせて駆除事業が行われている．また本種は在来生物に大きな影響を与えることから，環境省の定める特定外来生物に指定されている．

このように資源量抑制が望まれるブルーギルだが，琵琶湖での繁殖に関する研究や報告は多くない．このため筆者らは琵琶湖における繁殖生態に関する知見を得るため，5 年にわたる調査を行ったので報告する．

調査は目視観察に適した透明度のある，琵琶湖北端部に定点を設けて行った．調査は 2002 年から 2006 年にかけて繁殖期間中のほぼ毎日，スキューバ潜水やシュノーケリングによる直接目視のほか，水中デジタルカメラや水中ビデオカメラを用いて行った．5 年間で 3607 産卵床を調査した結果，繁殖開始時期は 6 月初旬～6 月下旬で，繁殖終了時期は 8 月中旬から 9 月初旬であった．また繁殖開始時期は年を追うごとに遅くなる傾向があったが，繁殖期間は 76～80 日で短縮されることはなかった．あらかじめ定めた調査範囲に繁殖期を通して形成される年間産卵床数は 192～407 床で，繁殖期初期に集中する傾向がみられた．産卵床を形成する保護雄の全長は最少で 12cm，最大で 24cm であった．産卵床の基質は砂礫，リター，砂礫とリターの複合型がみられた．産卵床は 0.4～5.7m までの水深で観察され，時期が進むにつれて深くなる傾向があった．産卵床単位でみた 1 繁殖期の繁殖成功率は 62.3～72.8% で，繁殖期初期に形成された産卵床で高い傾向が見られた．